コトワザあらかると

2022 年 11 月 1 日

日本ことわざ文化学会
6 号

干支のことわざ―　*虎*　―

時田　昌瑞

＜表紙絵の解説＞

虎のことわざをモチーフとした視覚作品は 10 種類ほどあるものの、ここでは主なカラーものに限った。

1. 虎の子渡し：ものごとをやり繰り算段することのたとえ。中国の説話に由来するもの。虎が 3 匹の子どもを産むと、その中の 1 匹は獰猛な彪で他の子を食おうとするので母虎がそれを阻むために苦心するという話が、川渡りの状景として伝わっている。図はその一枚で、江戸中期の浮世絵師・磯田湖龍斎による錦絵。川を泳ぎ渡る親虎の背に乗るのが彪で岸には子虎が 2 匹いなければならないのだが、何故か 1 匹しか描かれていない。このような図は浮世絵にとどまらず、刀の鍔や小柄の紋様として施されており、昭和期ころには男物の羽織の裏地を飾るものもあった。さらには、絵画や工芸にとどまらず、石庭のデザインとみなされる特異なものにも及んでいる。京都の龍安寺や南禅寺の枯山水の庭に配置された石や白砂利が虎の子渡しに見立てられている。
2. 虎に翼：もともと強いものがさらに威力をもつことのたとえ。図は戦前昭和期に自由学園を創立した教育家・羽仁もと子編「新撰いろはかるた」の一枚。この図の虎には翼がないが、同じ著者によるモノクロ図には翼を描いたものもあった。ここの言葉は中国の古典に由来する古いもので日本でも日本書紀に見られるのでことわざとしては最古の部類になる。鎌倉時代の説話『宇治拾遺物語』には「虎に羽」との別の言い回しもみられる。江戸期では曲亭馬琴がよく用いており、戦前まで使われていた。
3. 虎の威を借る狐：弱い者が強い者の権勢を頼りに威張ること。図は戦前期のいろはカルタの一種にあるもの。ここのカルタは大変珍しい一種で「仲裁は時の氏神」「盗人を捕えてみれば我が子」「畳の上の水練」など他に見られないものが多くある。ただ、マンガっぽい描き方のせいか、狐の後ろの虎が鮮明ではないが…。この語句も中国の古典に由来し、日本でも平安時代の『今昔物語』に見られる。

＜虎に関することわざ＞

日本には虎が関わることわざが約 170 ある。このうち現代も使われているものは 29 あり、最も使われていたのが、〇虎視眈々で 52 例。2 番が〇虎穴に入らずんば虎児を得ずで 36 例。3 番は 2 つあり、〇前門の虎後門の狼　〇虎の威を借る狐で 25 例。5 番が、〇虎の尾を踏むで 19 例。6 番は、〇騎虎の勢いで 15 例。以下は一桁台になる。〇虎は死んで皮をのこす（8 例）、〇虎は千里行って千里帰る（7 例）など。

江戸時代以前の古いものでは、〇虎に翼『日本書紀』を筆頭に、〇虎は以て皮を遺し人は以て名を遺す『将門記』、〇虎伏す野辺『拾遺和歌集』、〇虎の威を借る狐『注好選』、〇虎うそぶきて風起こる『袋草子』、〇虎の口を逃れる『保元物語』、〇虎の尾を踏む『平家物語』、〇虎を養う『太平記』、〇虎を千里の野に放つ『義経記』、その他。さらには宗教者が関わる例もある。平安時代の空海には、〇虎変じて犬となる（虎を描くと犬に見える絵の下手な事）、〇虎豹（コヒョウ）の鉞（マサカリ）を持つ（論峰が鋭い意）がある。鎌倉時代の親鸞・栄西・日蓮には、〇市に虎あり。同じく道元には、〇雲は龍に従い風は虎に従うがある。

コトワザあらかると６号

目　　次

干支のことわざ－*虎*－ ＜表紙絵の解説＞ …… (02)
目　次 …… (03)
第１部　ことわざエッセイ
第１章　奢る平家は久しからず　倶利伽羅峠・屋島・壇の浦。歩き旅。
…… 蟻川　剛 (07)
第２章 「チャンスは一瞬　幸運の女神は前髪しかない」…… 清水 泰生 (12)
第３章 「ことわざ君」と「慣用句君」との綱引き合戦模様
…… 時田 昌瑞 (16)
第４章　三つ子に習いて浅瀬を渡る …… 渡辺 慎介 (21)

第２部　ことわざコラム
第１章　歴史は繰り返す …… 古後 靖弘 (29)
第２章　あなたは、始点派か、終点派か？－始めよければ終りよし
…… 小森 英明 (31)
第３章 「コロナ禍における小さな変化」…… 佐古 恵里香 (33)
第４章　八重山の昔話２題ほど …… 辻　維周 (34)
第５章　寅年の名言をめぐる歴史散歩 …… 三木 恒治 (36)
第６章　リスクと虎穴と浅い川 …… 山口 政信 (38)
執筆者紹介 …… (39)

第１部　ことわざエッセイ

第１章　奢る平家は久しからず　倶利伽羅峠・屋島・壇の浦。歩き旅。

蟻川　剛

今年の大河ドラマでは、前半に源平の戦いがあるらしいというので、どんな映像が見られるのか注目していました。ところが、倶利伽羅峠の戦いも屋島の戦いも、ナレーションだけで済んでしまいました。

・倶利伽羅峠……2011 年 10 月 30 日（日）小雨

「くりから」という名前を耳にした時、子ども心になんだか楽しげな語感が印象的でした。その後、源氏と平家の戦いの中で、木曾義仲が火牛の計を用いて平家の軍を打ち破って、大勝した峠であることを知りました。

「牛が角に火のついたたいまつをつけて突っ込んできたから平家方は驚いた。とにかく水をかけろ。水をかけろ。でもそんなことをしても無駄だった。焼け牛（石）に水だ」

そんな歯切れのいい立川談志の地口も忘れられません。

でも、ずっと腑に落ちないことがありました。峠といえば、両方から上がってきた道が尾根のような高い所で出会い、峠を越えたら反対側に下がっていくものだと思っていました。峠という漢字を習った時のイメージも同様です。ところが倶利伽羅峠の戦いでは、峠に陣取っていた平家の軍は、源氏の軍に攻められてもとの道を引き返すのではなく、そのほとんどが谷底へ落ちて大量の死者を出して惨敗したのです。「平家物語」では、源氏の軍が平家の軍を前後から攻めたてて谷間に追い落としたとしています。いずれにしても峠という地形からあれこれ考えても、どうも納得がいきませんでした。

さて、米原から北陸路をたどり始めた歩き旅は、金沢までやって来ていました。そして倶利伽羅峠を目指した日の朝、金沢の宿を出発して北に向かって歩き始めました。開通が近い北陸新幹線の工事があちこちで見られました。また、北陸本線（当時）を特急列車が時々勢いよく走り抜けていました。約 3 時間で津幡（つばた）駅までやってきました。津幡からは、能登へ向かう七尾線が北へと分かれて行き、北陸本線は富山方面へと東へ向きを変えて行きました。国道もそれに沿うようにのびて行き、その道を歩き続けました。

やがて、国道に面して何本ものぼりが立っているのが見え、そこに道の駅がありました。日曜日の昼近くなので、駐車場には多くの車がとまり、売店の周辺はにぎわっていました。入口には、「倶利伽羅峠、津幡口」という看板がありました。道の駅近くで、国道から分かれて峠へ続く「旧北陸道」があります。その道はすぐに尾根へと上がり、尾根の背をたどるようにして峠へと進んでいます。何かのつごうで尾根をたどる道が、街道の道筋として選ばれたのでしょう。尾根を行く道は、地図では破線で表される細い道で起伏もありそうです。旧街道をたどるより、もっと楽に早く目的地の峠に行けるように、このまま国道を進むことにしました。そして、道の駅を出る前に、マスコットキャラクターのコーナーを見つけました。着ぐるみではなく樹脂の板状のもので、等身大より少し小柄で親しみの持てる表情の 4 体のキャラクターが立っていました。2 体は少年少女のような童顔の武将姿の「義仲君」と「巴ちゃん」で、もう 2 体は角にたいまつをつけて鋭い目をした茶色の牛でした。1 頭は「モー君」、そしてもう 1 頭は「カー君」で苦心の命名に思えました。

道の駅を出て１時間ほどで、鉄道の倶利伽羅駅に着きました。戦跡の最寄り駅なので、壁に大きく戦いの様子を描いた絵がありました。しかし、その絵は色あせて一部がはげ落ちていました。無人駅で駅前には商店もなく人影も見えません。近くの道路を車が次々と通り過ぎで行きます。小雨の降る天気では一層陀しさが増して、すぐに駅を離れました。倶利伽羅駅からは、尾根に向かう舗装道路がありました。はじめ道は水田の間をぬけ、やがてゆるやかな上り坂となって樹林の中を通って尾根に着きました。そこで津幡口から来た山道のような旧街道と合流しました。

いよいよ、舗装道路を峠の方へと進みました。道の両側の木々の間から数軒の民家が見られました。空は雲におおわれていて、高い木々に挟まれて続く道はぬれていてうす暗い風景の中を緩やかな上り坂が続きます。いったん途切れた民家の集まりが再び見られるようになり、左側に寺と神社の石段がありました。その前を通っていくと、路線バスのバス停がありました。ちょうどこの辺りが倶利伽羅峠ですが、あまり起伏の変化がなく通り過ぎてしまいました、少し進むと休憩のできる広場があり、10 人ぐらいのグループが静かに休んでいました。近くに供養塔もありました。そして、更に進むと道の右側が急な斜面となって落ち込んでいてそれがしばらく続きます。その斜面は、岩が露出しているような崖ではありませんが、草が茂っている急斜面がずっと下まで続いています。とても人が歩いて上り下りできるようには見えません。地図で見ると、ここが地獄谷といわれる所です。その谷を見下ろしつつ少し行くと、平家が陣を布いたという猿ケ馬場につきました。平らな土地で木がはえていますが、馬場と呼ばれ多くの軍勢がいたのですから、当時は木も少なく草原が広がっていたのでしょう。

その馬場の場所には、目印のように火牛の像がおかれ、倶利伽羅峠の戦いを解説する説明板が立てられていました。その解説によると、先程通り過ぎて来た寺と神社のあたりに北側から上ってくる道があり、そこからも源氏の軍が尾根に上がって攻めてきたというのです。平家の軍にとっては、正面の東からだけでなく、背後にも敵軍が現われて一斉に喊声を挙げて攻めかかってきたのです。突然の夜討ちに慌てた平家の軍は、態勢を立て直そうと敵のいない南の方へと引こうとしました。しかし、その方向にあったのは地獄谷で、夜の谷間へとなだれ落ちていきました。たとえはい上がろうとしても、次々と味方の軍勢が落ちてくるのですからなす術もありません。夜が明けて、何万もの兵士が折り重なって埋め尽くされた谷間は、どんな惨状だったのでしょうか。今では、緑におおわれた草深い谷間しか見ることができませんでした。ポイントは、倶利伽羅峠を通る旧街道が尾根の背を通っていたことでした。尾根の上に陣取っていた平家の軍は、源氏の作戦通りに谷間へ追い落とされて惨敗したのでした。

長い間の疑問が解けて満足した気持ちになって古戦場を離れると、旧街道から分かれて歩きやすそうな道を富山県側に下りました。山の中では人に会うこともなく石動（いするぎ）の街に入りました。そして、石動駅から列車で金沢へもどりました。

このあと開通した北陸新幹線は、石動付近から津幡付近までトンネルを通るので倶利伽羅峠の辺りを車窓からうかがうことは難しくなりました。また、北陸本線は「IR いしかわ鉄道」と「あいの風とやま鉄道」の２つの鉄道になりました。けれども、この２つの鉄道が乗り入れてつなぎ目となる駅が県境にある倶利伽羅駅となり、これは倶利伽羅駅にとっては、ちょっとした朗報ではないでしょうか。

一人来て倶利伽羅峠に虫の声　／　青空の見えて越中秋時雨

・屋島……2013 年 5 月 17 日（金）晴

屋島の戦いというと、必ずといっていいほど見られる挿絵があります。海上に平家方の女房の掲げた扇の的をのせた舟が浮かび、海に馬ごと乗り入れた那須与一が弓矢を構えてその的を狙います。そして、与一が扇の的を見事に射落とすという場面です。那須与一が弓の名人と呼ばれるようになり、源氏が屋島の戦いに勝利した象徴でもあります。そのような風景を求めて、高松から徳島へ向かう途中で通る屋島の戦跡を見ることを楽しみにしていました。

東京から朝いちばんの新幹線に乗り、岡山で特急に乗り継いで四国に渡ると、高松には 10 時 30 分頃に着きました。まだ新しそうな高松駅のビルを出ると、駅前は明るく開けていて、道を隔てて高松港がありました。かつての連絡船がなくなり、駅と港は完全に分かれています。港まで行くと瀬戸内海がとても広く見えて、船も絶えず出入りしています。これから訪れる屋島も見ることができました。

港から高松城跡を通りぬけて、広い道路を東に向かいました。高松の町を出て、工場の前を通ったり橋を渡ったりして屋島に近づくと、家並の間を通るようになりました。そして屋島の山を見上げるほどになって、琴電屋島駅に着きました。学生時代に訪れた時には、駅前からまっすぐにのびた道の先に屋島の山頂に昇るケーブルカーがありましたが、今はもう廃止されています。ただ、ケーブルカーの乗り場や斜面の途中のトンネルの跡に、それらしい名残りが見られました。琴電屋島駅も古びた駅になっていました。屋島の山頂にはシャトルバスで上がりましたが、長居をせずに下りてきました。

琴電屋島駅に戻ると、そこから屋島の東側へまわりこむように歩き始めました。屋島はその名の通り源平の戦いの当時は本土から離れた島でしたが、潮の引いた時には浅瀬となり戦いも起こりました。今では一本の川を残して埋め立てられて陸続きになっていて、平家物語に出てくる戦跡には説明板が立てられていました。戦いのあった「総門跡」を過ぎると義経の「弓流し跡」がありました。でも、埋め立て地の道路の脇にあるのでは、海岸線を想像するしかありません。更に進んで「錣引（しころびき）跡」を過ぎると道の脇を流れる細い水路の近くに半分埋もれた岩が顔を出していて、「祈り岩」という説明がついていました。あの那須与一が扇の的を射る時に、この岩に向かって一心に祈ったというのです。いよいよ近づいてきたなと思いつつ水路沿いの道を進みました。すると今度は水路の端に大きな岩が見えました。この岩は「駒立（こまだて）岩」といい、那須与一が海に入って行った後、的を射るためにこの上に駒を止めたという岩でした。与一は、海に乗り入れた後、馬を操りながら弓矢を構えたのではなく、海中にあったこの岩の上に馬を止めて、より安定した体勢で的を狙ったのです。挿絵では、海中の馬の足元までは見ることができず、このような岩があったことは知りませんでした。

「駒立岩」のある所から、水路がその方向を屋島の方へと変えていました。そして、その先の水路にかかる橋に取り付けられたパネルに目を引かれました。あの扇の的をのせた舟の、その大きさに似せて作られた大きなパネルでした。まだ新しそうで、扇の的も女房の衣装の色も鮮やかで、その表情まで分かるほどの近さでした。この近さなら的を射るのは容易に思えましたが、実際にはもっと距離があり便宜上最も近い橋にパネルを取り付け

たのでしょう。ただ、パネルのある方向は屋島を背にしていて与一が矢を射た方向ですから、当地の状況を思い起こすにはふさわしいものといえます。

さて、目標だった那須与一が扇の的を射た地点にやって来ました。しかし、屋島の南端の琴電屋島からたどってきた道のりは、屋島の全長からすると４分の１くらいに過ぎません。それはどういうことかというと、この地点が外海（瀬戸内海）に面した所ではなく、屋島と本土に挟まれた入江のようなものの外海からずっと奥まった地点にあたるということになります。現在は埋め立てられてしまっていて屋島と本土とを隔てる水面の幅がどれくらいあったかはわかりません。平家物語では、その時は風も強く海も荒れていたようだったといいます。しかし、外海と奥まった入江のような所では、いささか条件が違うのではないかと思いました。

那須与一の騎射の場所に立って、挿絵のような情景を想像しました。屋島と本土に挟まれた水域に扇の的をのせた舟が出て来ました。その背後には、屋島の大きな山影がそびえています。本土の海岸には源氏方が馬を並べ、屋島側には平家方が舟を並べて見つめています。那須与一は、一つの岩に祈りをこめた後、海へと馬を乗り入れました。そして、波の下に隠れている大きな岩の上に馬を立たせました。愛馬は、波を受けながらも岩の上で必死に踏ん張って与一を支えます。そして、跨った与一は矢をつがえた弓を弾き絞って、的に向かって矢を放ったのでした。

屋島を後にすると東に向かって歩き旅を続け、その日は、さぬき市の志度（しど）の町まで歩きました。志度の町には、四国霊場八十六番の志度寺があります。また、江戸時代の特筆される才人平賀源内の出身地で、その旧邸・薬草園と少し離れた所に記念館もあります。志度寺の町、平賀源内の町である志度に、もう一つ加えて「天空の町、志度」という名称を献じたいと思いつきました。志度の町が空中に浮遊しているわけではありません。音階は、ドレミファソラシド。「志度は空の上」にありますから。

門前に遍路集ふや朝雀　　（志度寺にて）

・壇の浦……2021 年 3 月 19 日（月）晴時々曇

その日は、厚狭（あさ）の駅を出発して、下関をめざしました。内陸の厚狭から海辺に道が出ても、山地が海に迫っていて山裾と海に挟まれたような土地が続きます。県名である山口という名は、幕末の政庁の所在地の地名ですが、岩国で山口県に入ってから広々とした土地に出会って来なかったので、山口の山は山がちな地域だからかなと一人合点をするほどでした。

やって来た長府の町も山と海に挟まれて細長くのびていて、そこを鉄道と国道が並ぶように走っています。長府駅を過ぎると、鉄道は北側の山の方へ曲がって行き、新下関駅へ向かって行きました。続いて、国道 2 号線も別れて北側の山の方へ行ってしまいました。けれども歩いている道の広い道幅は変わらず、更にまっすぐ西へと進みます。やがて、道路沿いにずっと続いていた大きな工場が途切れ、前方に遠くの山が見えてきました。足元の近くに磯の岩場が現われて海が広がってきました。見えていた山は海のむこうにあるので、九州に当たるはずです。とうとう本州の西の端までやって来たのかと思うとワクワクしてきました。しばらく信じられない気持ちでしたが、海岸線に沿って道が北へ回り込むと、それが確信に変わる物が見えてきました。大きな吊り橋です。こちらとむこうの両岸

にしっかりと橋脚を立てて橋を架けている関門橋です。もう対岸の地が、九州であることは間違いありません。

関門橋が架かっている所が、海峡の最も狭い場所です。そこが早鞆の瀬戸であり、その辺りが壇の浦です。見上げるように大きな通航潮流信号所を通り過ぎて橋に近づきました。関門橋の巨大な姿が頭上に迫るほどの所に来ると、道路の海側に広いスペースが設けられ、海に面して柵があって海峡を展望できるようになっていました。そこには、碇を振り上げた平家の武将とそれと戦う源氏の武将の大きな像があり、古戦場の雰囲気を出しています。柵に寄って海峡を見ると、貨物船が通っていました。現代の船とは比べものにならないほど小さな手こぎの舟でしょうが、壇の浦の戦いでは、海峡のこの辺りに源平合わせて数千艘の舟が蝟集して戦ったのでした。船のぶつかる音、刀、弓、矢の音、そして戦う者たちの喚声が渦巻いてどれだけ大きく響いていたのでしょうか。決して広い海峡ではありません。

しばらく海峡を見てから、九州の地に一歩を印すため、また対岸から海峡を見るため、海底トンネルを通って門司側に行くことにしました。振り返って道路を渡って海底トンネルの入口にあるビルに向かうと、ビルの手前にノンフィクションで読んだ海底トンネル開削の苦節譚を刻んだ完成記念碑がありました。その記念碑を見てから入口に入りました。エレベーターで下りると、地下道が続いています。地下道といってもとても明るく、人と自転車が途切れることなく通っていました。海底トンネルの地下道の全長は 700m余りで、歩いて 10 分ほどで門司側のエレベーターの前に着きました。

エレベーターで門司側に上がると、さきほどの下関側とは様変わりしていました。エレベーター以外にはトイレが主な施設のようで、係員らしい人も見当たりません。外へ出ると、道路が目の前にあるものの車は通りません。道を渡ると、そこは和布刈（めかり）神社の境内でした。松本清張の作品『時間の習俗』では、この神社の神事の写真がアリバイのトリックに使われていました。海に面している境内にはたくさんの木が茂っていて、木陰をつくっています。木々の間から対岸の下関側を見ると、午後の日を浴びて火の山公園をはじめとして明るく見えました。海岸の道路を走っている車も見えるようでした。

壇の浦の戦いの時には、九州側の地にも源氏とその味方となった軍勢が進出していました。両岸を源氏方に抑えられ、海上で劣勢となった平家方の武将たちは、死を覚悟して戦いを挑んで最期を遂げました。そして、戦う術の無い幼帝や女房たちにとって逃れる道は、海の中しかありませんでした。

再び下関側の展望広場にもどりました。源平の戦いの像の近くには、旧式の大砲も海に向かって数門並んでいました。幕末に攘夷の名のもとに長州藩が外国船に砲撃を加え、艦隊と戦いになったのもこの場所でした。目の前の海峡を横腹を見せていた貨物船の列が、少し目を離している間に後ろ姿を見せてずっと先へと進んでいます。そして、その列とすれ違うようにやって来た別の船の列が、みるみる近づいてきます。瀬戸内海から日本海へぬけるこの海峡は、実際に見たことはありませんがスエズ運河やパナマ運河のように、日本にとってずっと長い間とても重要な水上交通路でした。古い戦いの跡に感傷的になりながらも、休みなく活動を続けている海峡を見ていました。

春の潮海峡をゆく船の列

第２章　「チャンスは一瞬　幸運の女神は前髪しかない」

清水　泰生

2021 年の 4 月になった。東京 2020 が今年に延期になったがまだまだ見通しがつかない。2021 年前期(春学期)の授業は、日本語教師養成講座はオンラインと対面式のハイブリット、Ｄ大学はオンラインでクラス数が減った。Ｋ大学の別科の総合科目はオンラインと対面のハイブリットであった。

ようやく、私はトラックレースに出るようになった。審判もマスターズの試合等で行った。

2021 年 3 月、東京 2020 開催でゆれたが五輪はほとんどのところで無観客で開催、パラリンピックも一部を除いて無観客が原則となった。マラソン、競歩を札幌で観戦と思ったが、札幌へ行かなかった。その代わりと言えば変だが今年 2022 年の 8 月 28 日北海道マラソンを出走する予定である。

パラリンピックも観戦と思ったが、それも控え、今年の 10 月の東京レガシーハーフマラソンを出走する予定である。

2021 年 10 月の東京マラソンが来年 3 月に二度目の延期が決まった。「二度あることが三度ある」であった。今回走る予定だった東京マラソンの出走権を 2022 年 3 月開催にした。その代わりにバーチャル東京マラソンに出て 1 週間かけてフルの距離を走った。

2021 年 12 月全国高校駅伝、2022 年 1 月都道府県女子駅伝が行われ、私は審判(監察員)をした。審判をする際の移動のバスも消毒、手洗いがあった。2022 年 2 月びわこ全日本クロスカントリーの大会が予定通り行われ、私は走った。コロナ禍の前に大会は戻るのかなと思ったが、2 月中旬開催予定の青梅マラソンが中止になった。しかし、1 月大阪ハーフマラソン、大阪女子国際マラソンが行われたので、行う大会もあると思った。だが、2 月下旬開催予定の姫路マラソンが中止になり、3 月開催予定の徳島マラソン、鹿児島マラソンも中止になった。2 月下旬の大阪マラソンもエリートを除いて間際になって中止になった。残る主要なマラソンは東京マラソンと長野マラソン。二つとも私はエントリーしている。どうも二つともやりそうである。東京マラソンは PCR 検査、長野マラソンは抗原検査がある。もし陽性になったらどうなるのか、両マラソンの事務局に電話で聞いたところ東京マラソンは東京都保健所の方針でホテルで 10 日間隔離のようである。一方長野マラソンは陽性になった時点で至急家に帰ってもらう。公共交通機関を使って帰ってもよいとのことだった。荷物預かりは、東京マラソンはどうもなく、長野マラソンはあるようだった。

東京マラソンは PCR 検査があって引っかかったら 10 日間東京で隔離される。そうなると 1 週間後のスポーツ言語学会に大きな影響を及ぼす。私は学会の代表理事なので休むわけにはいかない。長野マラソンだけに絞ろうか。出るかどうかの考えは、二点三転した。そうしているある時、スポーツ店に行きその店員さんと話をした。長野マラソンは、審判の方が年配の人が多いので大会 1 か月を切ってからでも中止の可能性があり、東京マラソンはもう 1 か月なのでスポンサーとの関係で開催されるという見解だった。人のよい店員さんだったのでついナイキの厚底シューズを買ってしまった。しかし、この靴を買ったおかげで東京マラソンは余裕を持って完走となった。

出場をどうしようかと思っているところへ偶然ランニング学会会長で東京マラソン財団理事長の方から来ていたメールを偶然目にした。開催に向けて努力しているという内容だった。これを見て、主催者側も頑張っているのでこちらも出場すべきだ。それから「チャンス一瞬、幸運の女神は前髪しかない」という諺が浮かんできた。

今まで振り返ってみて､いい話は突然やってきて､ためらっているうちにそれが終わり、再び来ることがなかったことが多かった。

NYC（ニューヨークシティ）マラソン開会式のプラカード持ち、世界室内マスターズ陸上選手権大会開会式の旗手、そして、世界での講演は突然やってきて「当たって砕けろ」の精神で勇気をもって挑戦した。

若い人に伝えたい。何事もチャンスはそう多くないので「チャンス一瞬、幸運の女神は前髪しかない」の諺を信じて果敢に挑んでほしいと思う。

ということで、東京マラソン開催まで 1 週間。大会でとにかく 2 年間フルマラソンを走っていないので完走できるかという不安とコロナの PCR の結果の不安が入り混じっていた。

いよいよ東京マラソンの前々日 3 月 4 日、PCR の唾液を入れ接骨院でマッサージをし、そして飛行機で東京へ、羽田空港から東京ビックサイトへ行き PCR 検査を出しに…。検査容器を提出、代わりにアスリートビブス（ゼッケン）を受けとった。そして、夕食をとって銀座のホテルへ、その日は終わった。次の日の早朝 PCR の結果が陰性のメールが来てほっとした。その日、一日時間があったので明日の持ち物の確認や銀座を少し歩いた。100 均、吉野家などを見つけ銀座の街並みも少し変わったのかなと思った。午後オンラインでお世話になっている先生の最終公演をきき、そして早めに眠りについた。

いよいよ当日。スマホが必要だったのでスマホとスマホを肩につけるポーチを身につけ長袖で短パン、その上にタイツ、走るときに背負うトレイル用のナップサック着用でホテルを出て会場へ。着替えの荷物は 1 週間前に家から送ることができるが、スタート地点で荷物を預けることも捨てることもできない。スタート直前までタイツや雨具を着て直前にナップサックに入れナップサックを背負って走ろうと思っていた。ところが何とスタート地点に防寒具の衣服を捨てる箱があるではないか。だから、防寒用の衣服とナップサックを捨ててスタートについた。距離も 1m以上あけているというのも違っていて、実際は密であった。うーん。全く違う。スタートして 5 キロ 10 キロと進み、沿道には人がやはり多かった。自粛しているような様子はなかったと思う。給水は手を消毒してから給水してくださいという主催者側のアナウンスだったが誰もそれを守ろうとしない。10 キロ走ってあまり足に衝撃がない。やはり、厚底シューズ。安定したタイムで走れそうだ。思った通り足に衝撃が少なくて安定したレースで完走。完走後すぐマスクをもらったが、これも主催者からマスクは配布しないので、走っている間はマスクをしなくてもよいが持参して走るという話だった。完走の後、スマホで国際会議の掲示板を見た。私が走っている時に、あるスポーツ関連の国際会議（オンライン）の私のポスター発表の掲示がしてあって、ゴールした後、質疑応答のオンライン掲示板にスマホでアクセスして私のポスター発表の質問に対応した。まさに東京マラソンと国際会議の二刀流、こんなことができるのも ICT さまさまだと思う。その後、ホテルに戻り夜、飛行機で大阪に戻った。

そして、時は 2022 年 4 月Ｄ大学の学部留学生対象の授業はハイブリット、交換留学生対象の授業はオンライン、Ｋ大学別科の総合科目授業はハイブリット、日本語教師養成講座はハイブリットで始まった。

そしてその上に、別科の日本事情の授業がハイブリットですることに急遽なった。

2022 年 4 月 16 日夜行バスで長野へ。長野マラソン大会会場で抗原検査をして問題がなくナンバーカードをもらい、そしてホテルのある上田へ。上田で一泊し 4 月 17 日早朝電車で長野市内のスタートへ。荷物を預けてスタート。スタート地点はやはり応援の観衆が多かったがだんだん走っているうちに人が少なくなった。調子が悪いので 5 キロで棄権。棄権者収容のバスに乗ったが防護服のひととビニールで覆った座席、物々しい体制で驚いた。早い地点で棄権したので速いランナーと会場でかち合い、2017 年びわこ毎日マラソンで優勝したケニアの選手や猫ひろしさんなどに出くわし、写真を一緒に撮ってもらった。その後 JR 特急で京都に向かい。京都で一泊、その翌日Ｄ大学で授業だった。

コロナ禍が続く中、私のマラソン、授業等も紆余曲折であった。この先どうなるのか「一寸先は闇」である。しかし、「チャンスは一瞬」なので、チャンスがあったらこういう状況でも勇気を持ちつづけて行動できたらと思う。

ナイキの厚底シューズ（なんと 2 万 6000 円もした）

東京マラソンフィニッシュ（ゴール）直前

長野マラソンの受付会場(ビッグハット)

第３章　「ことわざ君」と「慣用句君」との綱引き合戦模様

時田　昌瑞

はじめに　長らくことわざを研究してきたものの、何かと頭を悩ましてきたのがことわざと隣接する分野との関係だ。『岩波ことわざ辞典』（岩波書店　2000 年）では新しいことわざとして取り上げた〇赤信号皆で渡れば怖くない　〇亭主元気で留守がいい　〇鶏は三歩歩けば忘れる　〇豚もおだてりゃ木に登るなどに対しては流行語を一緒くたにしているとの批判の声もあった。たしかに、これらの言い回しはテレビやアニメで見られていたものだから、批判は何の根拠の無いものではないのだが…。名言・格言など幾種類もある隣接分野の中では、とりわけ慣用句との区別と線引きが難しく、未だ確たる答えを得られていない。小稿ではささやかな試案を提示してみたい。

1）慣用句なのかことわざなのか？　3 つの資料文献の比較から

同じ表現の語句が辞典によって異なる場合があり、戸惑うことがある。こうした事例を取り上げ議論が深化につながることを期待して稿を進めたい。

現代比較的よく使われる慣用句 1563 句を収録した『日本慣用句辞典』(東京堂出版　2005 年、東京堂版と略称する）の頭字「あ」には 79 語句が収められている。大半は、〇あぐらをかく　〇あごを出す　〇足を洗う等のように慣用句として口を差し挟む余地のないものだが、なかには疑問符がつくものも混じっている。〇足下から鳥の立つよう　〇頭隠して尻隠さず　〇後の祭り　〇後は野となれ山となれ　〇虻蜂取らずの 5 例は、ごく普通のことわざ辞典に載っているものなので、これって慣用句なの？　と疑問になってしまう。

この疑問から、同辞典の「あ」の 79 語句を 2 種類のことわざ辞典と較べてみようと思いついた。「あ」の頭字に限定したのは調べるのに手ごろな数だと思ったからだ。一つが約 7300 項目ある中型のことわざ辞典を代表するものとして『新明解故事ことわざ辞典』（三省堂　2001 年、三省堂版と略称）。ここには 79 のうち 18 の語句が見出された。なお、三省堂版はことわざを中心に格言・名言、故事・成語を収載したもので、一つ一つの語句が何かは明記されていないものの、ことわざが中心とのことから、この 18 語句はことわざの範囲のものと見なしても間違いではないと見ている。つまり、三省堂版では東京堂版が慣用句とした 79 語句のうちの 23%をことわざと扱っていることになる。これは大きな違いといえよう。

もう一つが、子供向け辞典として約 3900 語句を収録する『新レインボー　小学ことわざ・四字熟語辞典』（学研プラス　2014 年、学研版と略称）で、「あ」には 195 語句があり、東京堂版と重なる語句が 59 ある。ただ、学研版（「あ」に限るが）は慣用句（70%）ことわざ（19%）四字熟語と故事成語がそれぞれ 5%となっており、慣用句の占める割合が著しく高いものの、それでいて書名に慣用句の文字がないのだからちょっと不思議な本なのだが…。書名はさておき、中身の話にもどす。学研版はことわざの割合が低いものの、東京堂版とは上掲の 5 つのことわざが重なっていた。つまり、この 5 つの語句は比較した三省堂版と学研版ではことわざと見なされていたことになる。

2）常用ことわざランキング 100 から

膨大な数量となることわざと慣用句をどう扱うか、これだけでも頭を抱える問題だ。それなので限られた時間でやるには対象を絞るしかない。第 1 章のように「あ」の頭字に絞るのも一案ではあるものの、これだと資料による数量にばらつきがでてしまう。手ごろの数量のものとして初めに頭にあったものはいろはカルタだった。江戸系だけなら 48 句に過ぎないのでやり易いと思われたが、見込みは見事に外れた。現代語を主にする慣用句辞典や子供向けのことわざ辞典には江戸時代のカルタの語句を載せているのが少なく比較するには適していなかったのだ。

そこで現代通用していることわざであることが必要条件だと考え直し、2020 年に出版された『世界ことわざ比較辞典』の付録の現代常用ことわざランキング 100 が思い浮んだ。本稿ではこの中から紙幅の都合で上位 50 までのものを調べることにした。

常用ことわざランキング 100 は、筆者が新聞やテレビ放送を主に 1992 年から 2015 年までの間に実際に使用されたことわざを収集し､それを使用頻度順にランキング化したもの。ただし、「足を引っ張る」「鍵を握る」などのいわゆる慣用句は除外してある。除外した理由は慣用句の一部は使用頻度の高いものが多く、ことわざのランキングにならないと思ったからだ。

これから､常用ことわざランキングにある 50 位までのことわざを前章で取り上げた 3 資料（東京堂版、三省堂版、学研版）と照らし合わせて見ることにした。

50 句のうち一番数の多いのが学研版で 49、次いで三省堂版が 44 であり、東京堂版は 31 と 3 社で異なる数値になった。東京堂版が著しく少ないのは、ランキングのものが慣用句を除外していることが大きく関係しているとみられる。改めていえば、東京堂版は慣用句辞典であり、他はことわざ辞典であるから当然といえば当然なのだ。

照合した結果を明示するが、少し注記を添える。〇囲みの数字はランキングの順位を表すもので、例えば①は 1 位、⑨は 9 位となる。なお、ランキングには頻度が同数のものがいくつかあるものの､その場合は五十音順にして順位を定めてある｡結果としては、Ａ）3 資料の全部にあるタイプ（29 例）、Ｂ）三省堂版と学研版にだけあるタイプ（15 例）、とに大別できる。Ｃ）その他には三省堂版と東京堂版とに無いタイプが 3 例（⑫目白押し ㉜いたちごっこ　㊹八方美人）、三省堂版のみ無いタイプが 2 例（⑤太鼓判を押す　⑧氷山の一角）、3 つ全部にないのが 1 例（⑬一匹狼）ある。Ｃの件についてＡＢに先立って少し触れる。一般的傾向になるのだが、辞典が違えば収録する語句は微妙に異なる場合が多く、それぞれの辞書編集の方針によっては四字熟語を外したり、明治以降に西欧から入ったような新しい語句は収載されない場合も少なくない。Ｃの場合もこの一般的傾向に沿ったものになっていると解釈している。

ここでの一番のポイントはランキングと異なる判定となっているＡとＢタイプの場合だと考えられるので、これを具体的にみてみる。ＡとＢに分けた上でランキング順に見ていくが、その前提としてことわざと慣用句の「定義」を確認しておきたい。国語辞典の記述は大同小異なので代表して『新明解国語辞典』（三省堂）から引用する。ことわざ：その国の民衆の生活から生まれた教訓的な言葉（短くて口調のいいものが多い）。慣用句：2 つ以上の単語が連結した結果、それぞれの語に分解しては出て来ない、別な意味を全体として表わすもの。ここで注目したいのは、慣用句は語句の形が問題であって、意味は別のも

のになるとの点だが、少し分かり難いので補足したい。典型的な慣用句の例としてよく引き合いに出される「油を売る」を参考のために見ておきたい。まず、油を売るには、灯油などの油の類を販売するとの意味がある。江戸時代に髪油を売る商人が客と話し込みながら商売したことに由来し、そこから仕事をさぼって無駄話をする意となった。確かにこれなら、販売の本来の意味から怠けるという別の意味になったと分かる。

さて、［A］の内容は以下のようになる。②寝耳に水　④目から鱗が落ちる　⑦二足の草鞋　⑨背水の陣　⑩二の舞　⑪白羽の矢が立つ　⑭しのぎを削る　⑮歯に衣きせぬ　⑯一筋縄では行かぬ　⑰対岸の火事　⑲絵に描いた餅　⑳背に腹は代えられぬ　㉒後の祭り　㉓火に油を注ぐ　㉗青天の霹靂　㉘二の足を踏む　㉚火中の栗を拾う　㊳渡りに船　㊴両刃の剣　㊵海のものとも山のものともつかぬ　㊶同じ穴のムジナ　㊷九死に一生　㊸喉から手の出る　㊺高嶺の花　㊻鬼に金棒　㊼手塩にかける　㊽あうんの呼吸　㊾縁の下の力持ち　㊿元の木阿弥

この 29 例は慣用句辞典である東京堂版が慣用句としたもの（学研版も 14 例あり）だが、上記の慣用句の定義に適っているであろうか。しかし、ぴったりと適合するものは見当らないと思われる。それでも強いていえば㉓火に油を注ぐ、であろうか。ところがこの語句は最近になって古代ギリシア語にまで遡る大変古い語句であることが判明した。日本では明治後期に見られ始めるものの、常用となるのは戦後になってからで、厳格に言えば別の意味になっているとは言い難いのだ。ただ、上記の定義は、いわば原理原則の狭義の定義といえるようで、実際には比喩的慣用句と呼ばれるものが別に多くあり、こちらの存在がことわざとの関わりを複雑なものにしている。こうした例を挙げると、○赤子の手をひねったよう　○大船に乗ったよう等の例があるので、こちらであれば該当するものは多数出てくるのは不思議ではない。特に□に□形（鬼に金棒、寝耳に水）、□の□形（後の祭り、二足の草鞋）も該当するとすれば、ことわざに及ぼす影響は計り知れないほど大きくなる。しかし、この議論は差し当たってはここまでで留め、論を先に進める。

［B］の内容：①一石二鳥　③三度目の正直　⑥疑心暗鬼　⑱一寸先は闇　㉒弱肉強食　㉔他山の石　㉕棚から牡丹餅　㉖一朝一夕　㉙出る杭は打たれる　㉛長いものには巻かれろ　㉝十人十色　㉞我田引水　㉟急がば回れ　㊱塞翁が馬　㊲自業自得

Ａに比べるとほぼ半数になるものの、顕著な違いがある。15 例のうちに四字熟語が 7 例もあるからだ。この違いは、四字熟語は慣用句ではないとする立場の東京堂版であれば当然のこと。他方、三省堂版と学研版に四字熟語は収められている。筆者も自分が編纂した辞典に四字熟語の主要なものは収録した。その際に基準とした考えは、四字熟語の形だけでは判断できないということであった。いくつかこの事例を取り出してみる。まず、①一石二鳥は、江戸時代末期に西洋から入ってきたもので、当時は「石一ツニテ鳥二羽ヲ殺ス」と訳され、大正時代ころに「一石二鳥」の四字熟語の形が現れた。余談になるが、四字熟語形は戦前までは 2 例しか確認できておらず殆どが戦後からとなる。次に、⑥疑心暗鬼は「疑心暗鬼を生ず」などと言い表され、もともとは中国の『列子』に由来するもので、江戸時代でも四字熟語の形は用いられていなかったようだ。㉝十人十色は、江戸時代に 12 通りもの言い回しを確認している。「十人よれば十国の者」「十人が十種」などとあり、最終的に「十人十色」に収斂したようだ。こうした例からいえば、形だけで判断するのはいささか疑問になる。

3）ことわざの美質とは

ことわざの抽象的な定義は多くの国語辞典にあるものの、実際にはさまざまに解釈され「百人百様」といえる。筆者はことわざを絶妙な譬えを有する、語呂よく簡潔な表現で多様な内容を面白く言い表した言語芸術だとみている。また、一般に言われるようにことわざを教訓の言葉だとは見なさい立場をとる（注）。

言語芸術たることわざの生命線は言語的美質にあると考え、①語呂　②簡潔性　③妙なる多様な表現によるものとみている。ことわざの美質となる要素が計測できれば隣接分野との区別立てができるものと考えている。こうしたことわざの美質は次のような豊かな表現法と固有な文型から窺うことができよう。

［Ⅰ］表現

ａ）奇想法（鴨がネギ背負ってくる）　ｂ）誇張法（塵も積もれば山となる）　ｃ）押韻・同音反復法（花の下より鼻の下）　ｄ）反意語組み合わせ法（聞いて極楽見て地獄）
ｅ）列挙法（地震雷火事親父）　ｆ）掛詞法（なし［梨と無し］のつぶて　ｇ）逆説法（ゆっくり急げ）　ｈ）言葉遊び法（犬が西向きゃ尾は東）　ｉ）洒落法（恐れ入谷の鬼子母神）
ｊ）謎かけ法（親の意見と冷酒は後できく）　ｋ）人名化法（合点承知の助）

［Ⅱ］文型（簡潔性の範疇に限定した）

ａ）体言止め：①□の□（対岸の火事）　②□は□（旅は道連れ）　③□に□（鬼に金棒）
④□より□（花より団子）　⑤□から□（二階から目薬）　⑥□も□（仏の顔も三度）
⑦□で□（後足で砂）　⑧□と□（義理とフンドシ）
ｂ）短縮形：○棚から牡丹餅→タナボタ　○泥棒を捕えて縄をなう→どろなわ
ｃ）四字熟語化：○我が田へ水を引く→我田引水　○羊頭を掲げて狗肉を売る→羊頭狗肉

ことわざの美質や特性は、それが具わっていればいるほどことわざらしさが増すと考えられる。そこで、こうしたことわざらしさを測る尺度として＜ことわざ度＞という概念を導入し、その度合の程度を計測すればことわざか否か判定にできるのではないかと考え始めている。この意味合いにおいて本稿が試論となる。

4）綱引き合戦の分析

合戦になぞらえて言えば、本稿の目的は、東京堂版などで慣用句の範疇に取り込まれた多くのことわざをことわざの陣営に取り戻す試みだと定めている。明治期までは、慣用句との言い回しは存在せず、今日、慣用句に相当する語句を含めてことわざ・俚諺、譬え、世話、下世話などと呼ばれていた。慣用句がごく普通に口にされるようになったのは戦後しばらく経ってからだ。

これからランキング 50 の中から東京堂版で慣用句とされた語句についてことわざ陣営への「奪還」を試みてみたい。

○寝耳に水②：江戸期から現代まで常用され続けている珍しい存在。□に□の体言止めでの最大の用例数をもつ。江戸期で 91 例の第 49 位、戦後の現代が 183 例で第 2 位。
○目からウロコ④：人の目にはウロコはないのでここに誇張・奇想がみられる。□から□の体言止め。
○二足のワラジ⑦：そもそもワラジは一人で二足は履けないので、発想の奇抜さと誇張が窺われる。□の□の体言止め。

○二の舞⑩：「二の舞を演じる」等といって舞楽に由来する歴史のある言葉。そもそも「二の舞」は曲名であって、「二」と「舞」が繋がったものではない。
○白羽の矢が立つ⑪：弓の矢の羽は鷲や鷹などの羽が用いられ色々な模様があるが、白羽の矢は神に捧げる人身御供を指定する矢のことで、昔の伝承から生まれた特別なもの。
○歯に衣きせぬ⑭：歯に衣を着せて飾りたてたり、衣で隠したりせずに思う所を包み隠さず口にするとの意味合いになることから、語句自体が譬えになっている。
○しのぎを削る⑮：しのぎとは一般的には、凌ぎやすい季節などと使われるが、ここは刀の部位のこと。刀身の間に高くなっている筋があり、それを指す。刀を激しく打ちかわす際にこのしのぎが削られてしまう程に思うことからいう。ここのしのぎは現代では慣用語とはいえない。
○一筋縄では行かない⑯：文字通りに解釈しようとすると何の事か分らないが、一筋縄が一本の縄の意で、行かないが、できない意だと分れば理解できる。語句全体が現代の慣用表現とはいえない。
○対岸の火事⑰：江戸期は「川向の喧嘩」、明治期は「彼岸の火事」「向岸の火事」などといい、対岸形が定着したのは戦後。慣用句とするには時間が不十分か？
○二の足を踏む㉘：二の腕は肩と肘の間の部位を指すが、二の足は体の部位ではなく足を踏み出す二歩目のこと。二の腕に較べて二の足の意味の知悉度は高くないのでは？
○火中の栗を拾う㉚：イソップ寓話に由来する西欧の古いことわざ。日本では戦前から見られるものの、常用となるのは戦後。現代のことわざ辞典には必ず入っていると思われる。
○渡りに船㊳：仏典に由来する大変古い語句。日本でも鎌倉期から見られ、古くは「渡りに船を得る」と動詞を伴う形であった。反対の意味となる「渡るに船を失う」との言い回しは、かつてはあったものの、明治期以降は消えている。
○両刃の剣㊴:江戸期に用例が一つあるものの、常用となるのは戦後になってからなので、判定を下す材料が足りないが、□の□の体言止めの一種ではある。
○同じ穴のムジナ㊶：江戸期は「一つ穴の狐」とするものが飛びぬけて多く、ついで「同じ穴の狐」、3 番目として「一つ穴のムジナ」が出てくる。「同じ穴のムジナ」は 4 番目。戦後になると 1～3 番は消えてしまう。
○喉から手の出る㊸:単語はありふれたものながら、情景を思い描くと奇想の範疇に属し、非現実的なシュールな句といえる。

むすび

机上での慣用句との合戦を試みてみた。ことわざ度の構成要素が少し明らかにできたかと思っている。とりわけ体言止め文型を主要なことわざの文型の一つとして位置づければ、ことわざとしての正統性が隣接分野、特に格言の分野に堂々と申し立てできると考えている。
注：江戸系いろはカルタ 48 句を対象に教訓性の有無を調べたことがある（時田昌瑞『ことわざ検定　上巻』シンコーミュージック・エンタメイント　2011 年）。直接に教訓がある語句は「老いては子に従え」など 6 句。「論より証拠」のように間接的ないし反面教師のようなものが 19 句。「憎まれっ子世に憚る」のような教訓性のないものが 23 句であった。ただ、間接的なものは語句だけからでは教訓を感じ難いので、実感レベルでの教訓性は低くなる。全体での教訓性の割合はたったの 13%に過ぎないと見ている。

第４章　三つ子に習いて浅瀬を渡る

渡辺　慎介

このことわざを江戸時代の文献の中に見つけた時、すぐに「負うた子に教えられて浅瀬を渡る」と同じ意味のことわざであることに気付きました。時には未熟の者から物を教えられることがあるという譬です。「負うた子」では子の年齢が分かりませんが、表記のことわざには「三つ子」とありますから三歳の子であることは明白です。きわめて幼い子なのです。どちらのことわざも背負った幼い子供に教えられながら瀬を渡る情景が思い浮かびますが、おそらく背負うのではなく肩車をして瀬を渡る情景なのではないかと想像します。肩車をすれば子の視線は、背負っている大人の視線より高くなり、浅瀬のある場所をよく見通すことができ、進むべき方向を指示しやすくなるからです。ところで、後になって気付いたことですが、時田さんの「岩波ことわざ辞典」には、「負うた子に教えられて浅瀬を渡る」の項で表記のことわざが引用されていました。

未熟な者から何かを教えられる経験をすることができるのは、大変ありがたいことです。それは誰もが経験できることではないのかもしれません。そうした経験をする可能性が高い人は、おそらく教師であろうと思います。いつも年下の、しかも未熟な者と向き合っているからです。しかし、未熟とは言え、こちらの考えとは全く異なる視点から質問することもあり、質問に答えるのは必ずしも容易であるとは限りません。大学で教える経験もすでに十分に積んだある時、とんでもない質問に出くわしたことがあります。それは学部1年生の「物理演習」という授業を担当していた時です。

大学で最初に学ぶ物理は「力学」でしょう。私が担当した「物理演習」は、その「力学」の演習だったのです。高校でも力学は学びますが、大学で学ぶ力学は高校までの力学と少し異なります。力学の根本原理は、ニュートンの運動法則です。それは高校も大学も変わりません。運動の法則の中心課題は、ニュートンの運動方程式です。高校ではニュートンの運動方程式を、物体の質量と加速度の積は物体に加わる力に等しいと置きます。大学では、その運動方程式の加速度を速度（あるいは速さ）の時間による微分、又は位置の時間による微分で表現します。そうしますと、大学で学ぶニュートンの運動方程式は、微分を含む式、微分方程式によって表現されます。その微分方程式を解けば運動方程式の解（答え）を求めることができます。高校の力学では、ニュートンの運動方程式を微分方程式で表すことはしませんし、微分方程式を解くこともしません。ニュートンの運動方程式、つまり微分方程式の解を公式として用い、力学の問題を解くのが高校までの力学なのです。

さて、私の「物理演習」では、ニュートンの運動の法則を一通り復習してから、微分方程式の解き方を解説した20ページほどのプリントを用意して受講生に配布していました。さらに、質問用紙まで配布して次週までに質問を書くように促します。翌週は、まず質問用紙を回収して質問に答えます。質問用紙に書かれた質問に次々と答えて行きます。なかには、誤字脱字を指摘する書き込みもありますが、それも質問として受け入れると事前に伝えてありました。そうこうするうちに、とんでもない質問に出くわします。質問用紙には、「“定数変化法”を使うと、どうして微分方程式が解けるのですか？」と書いてあります。定数変化法は、微分方程式を解くための一つのテクニックです。プリントでもそれを解説

しています。どの微分方程式の本にも定数変化法の説明はあります。しかし、どうしてその方法を使うと解けるかの説明を読んだことがありません。その質問用紙を読むと、私はすぐに「この質問の答えは分かりません」と言い、「次週までに数学者に聞いてみます。」と伝えました。その時、誰にこの質問をぶつけようかをすでに決めていました。分からないことは誰か他の人に聞く、という反応は私には極めて当然のことでした。

講義が終わり部屋に戻ると、その頃東大にいた友人の数学者にすぐに電話をします。多忙の友人がたまたま研究室にいました。電話の趣旨を伝えると、友人は言います。「その問題ならば、たまたま先日同僚のＯさんと議論をしました。結論から言えば、よく分からないのです。ベルヌーイが最初に使ったらしいところまでは溯れたのですが、何故その方法で解けるのかと問われると、その理由は分かりません。」そんな答えが返ってきました。物理や数学を商売にする人なら誰でも知っている“定数変化法”という手法に、そんな謎が隠されていることに私自身がショックを受けました。それはともかく、翌週の「物理演習」の講義では、前週の講義以降の事情を説明した上で、「申し訳ありませんが分かりませんでした」と言って、謝るより他にすることはありませんでした。

質問をした学生（女性）は学部四年生の一年間の卒業研究と、大学院博士課程前期（修士課程）の二年間、合計三年間、私達の研究室で研究を続けた後に、企業に就職しました。彼女の修士論文の謝辞にこんな言葉が記されていました。「学部一年生の『物理演習』の講義の質問と解答によって、失われかけていた知的好奇心を取り戻すことができました」と。質問に即答できなかった私の不勉強を咎めることもせず、よく分かっていそうな事柄でも実は理由が明白でない場合もあるのだと積極的に捉え、自らの知的好奇心を高めてくれたのです。学生には感謝の言葉しかありません。

学生の質問に答えられなかった経験をしてから、これまでよりも素直に数学に接することができるようになりました。ある公式を導くとき、与えられた数式にある操作をすることがあります。たとえば、その数式を微分するという操作をすることです。これまでならそうした操作は、従わなければならない命令のように感じていましたが、学生の素朴な質問を受けた後は、どうしてそんな操作をするのか、その操作に何の意味があるのかなどのように、自由に物事を考えることができるようになりました。まさに、「三つ子に習いて浅瀬を渡る」の譬の通りです。この意味でも質問した学生に感謝しています。

質問に関することわざに「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」があります。異なる表現に、「問うは一時の恥、問わざるは末代の恥」、「問うは当座の恥、問わぬは一期（いちご）の恥」があります。いずれの表現も「質問するのは恥である」と言っています。もちろん、「一時の恥」、あるいは「当座の恥」との注釈付きですが。質問するのは恥であり、分からないことを聞くのは恥なのです。それは日本の文化であると考えられます。たとえば、小学校から大学まで、授業や講義の途中で、あるいは終わりに、先生から「質問はありますか」と問われた経験は私にはありません。たとえ先生の教える内容を理解できなくても、質問をしないのがあたかも常識であると考えるのが日本の教育文化なのかもしれません。

これは、教育を効率という側面から見た場合には、大きな損失です。分からないことをその場で聞くことができれば、これ程無駄の省ける行為はありません。分からないことをそのまま放っておけば、分からないことが積もり積もって、その教科なり科目の理解不足に繋がることは間違いありません。場合によっては、その科目が嫌いになってしまわない

とも限りません。分からないことはその場で解決する、そうした行動が教育の効率を高めます。もちろん、質問によって授業の進行が妨げられる不利益はありますが。

現在の初等・中等教育の教科書には、「どうしてだろう？　考えてみよう」、「何故だろう？考えてみよう」の設問が多用されているのではないかと想像しています。そうした設問の前提に、「分からないことは質問しよう」との呼び掛けがあってしかるべきであろうと考えますが、現状はどうなっているのでしょうか。

私は、講義を担当するようになってから、学生に質問を促すように心がけました。テーマの切れ目や、講義の終了時には必ず、「質問はありませんか？」と質問を促すと同時に、「質問をして相手をやり込めようとするのは一つの見識かもしれません。やり込めるのも大事かもしれませんが、それよりも分からないことはその場で質問をして理解をする方がもっと大切です」と学生に伝えました。

質問の大切さを知るようになったのは、学会の発表を経験したからかもしれません。最初の学会発表は学部４年生の時でした。与えられた卒業研究のテーマを、ほぼ指導教授の指示通りに実行して得られたある測定結果を物理学会で発表しました。発表後の質問はやや抽象的な内容でしたが、指導教授が答えて下さいました。二度目の発表はその二年後、修士二年の時です。修士二年目の時期は、私の指導教授がアメリカに出張していたため、自分で研究テーマを決めなければならない極めて厳しい状況にありました。そんな中で、当時流行になりつつあったある現象を、自分の得意とする分野に採り入れることによって何とか修士論文を完成させようとしていました。それは、ある周波数 f の波が存在する系に、外部から振動数 $2f$ の振動を加えることによって、周波数 f の波の振幅を増幅させる、つまり大きくする試みでした。幼稚ながらその理論を作り、実際に実験によってそれを示すことができました。その結果を物理学会で発表することにしたのです。その発表には緊張しました。後ろ盾となる指導教授は不在ですから、自分ですべてに対処しなければなりません。緊張の内に何とか発表を終えると、質疑に移ります。すぐさま質問の手が上がります。「波の振幅が大きくなったのは、振動数 $2f$ の振動を加えることによって、電子の温度が上がったためではないか？」思ってもいない質問に、私は演壇で立ち往生してしまいます。少し後の私ならば、それに反論することは容易であったかもしれませんが、その当時の私には反論の材料はありません。立ち竦んでいると、すぐに次の質問の手が上がります。当時新進気鋭の研究者Ｉ先生が立ち上がります。「〇〇先生の今の質問ですが、わずか１ボルトや２ボルトの電圧を加えたところで、電子の温度が上がるとは思えません。そんなことよりこの実験は面白いと思いませんか」とコメントしてくださいました。未熟な私を励ましてくれる言葉でした。それと同時に、会場の雰囲気も私の発表結果を好意的に受け入れるものに変化します。似たような経験はその後にもありました。ある実験結果を物理学会でしました。その２、３年後であれば、結果を説明する理論を簡単に構築できましたが、その当時は理論的に説明できなかった実験の結果です。講演を終わった後の休憩時間に、ある先輩の研究者が「面白い話に発展しそうだね」と言って励ましてくれました。質問やコメントは発表者をやり込めるのではなく、励ます側面があることをここでも教えられたのです。こんな経験が、講義における学生への質問奨励に繋がったのかもしれません。

ネット上でスペイン語のことわざを楽しんでいる時に、質問に関するこんなことわざに巡り合いました。“Preguntando se va a Roma.”そして、こんな訳と解説も載っています。

「尋ねながらローマに着く。質問すれば、あらゆることの知識を身に着けることができるようになるという譬。」そこで、「世界ことわざ比較辞典」の「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」の項を開きますと、フランス語に同じことわざを見つけました。“En demandant on va à Rome.”です。「尋ねて行けばローマに至る」と訳されています。

ローマを用いたことわざでは「すべての道はローマに通ず」がよく知られています。英語で書けば、“All roads lead to Rome.”です。このことわざを物理の論文に使ったことがあります。日本ことわざ文化学会へ入会する前のことです。それは、やや複雑な電気回路を伝わる波の解析をした論文に関係します。回路は理論的には、無限に長いと仮定します。その回路の波を記述する方程式は複雑で解くことはできません。しかし、適当な近似をすれば、よく知られた方程式に帰着して、その波が衝撃波 shock wave になることが分かりました。それだけでは面白くないので、近似の精度を高めることを試みます。つまり、元々の解くことのできない方程式の持つ性質に近づけようとしたのです。こうした操作をすると、必ず「思わしくない項」が現れます。その「思わしくない項」を消去するテクニックとして「繰り込みの方法」があり、そのテクニックを使った結果として、衝撃波の振幅が大きくなるとその速度は変わることが分かりました。かなり苦労をして作り上げた計算結果と、実験結果を組み合わせた論文を作成して、研究誌に投稿しました。理論も実験も自信のある論文でした。案の定すぐに審査を通過して印刷に回されます。

その論文が印刷されてしばらくすると、研究誌の編集から一通の手紙が届きます。そこには、ベルギーの研究者からコメントが寄せられたので、意見があれば三カ月以内に回答せよと記され、その研究者のコメントが同封されています。コメントも回答も研究誌に掲載され、論文に近い扱いを受けます。コメントに、我々の理論的な方法の批判はありません。むしろ優れた方法として評価しています。しかし、彼がこれまで作り上げた方法で計算した結果と我々の結果が異なるとして、その計算過程と結果を示しています。ベルギーの理論家の方法は、私から見ればやや風変わりな方法でしたが、それでも同じ結果が出ないのは腑に落ちません。どこかに「思わしくない項」があるに違いないと思うのですが、どうしてもそれを見つけることができません。そうこうする内に、回答の提出期限が近づいてきます。その頃、東大で学位を取った後に、就職がないために博士研究員として私たちの研究室で研究を続けていた若い研究者がおり、その彼とある時雑談をしていました。彼は件の論文の共著者ではありませんが、コメントの内容は理解していました。どこがおかしいのかね、などと愚痴を言っている時、私はコメントに記された一つの項に問題がありそうだと気づきました。その場にあった数学公式集をめくると、その項が確かに「思わしくない項」だったのです。それが見つかれば話は簡単です。ベルギーの研究者の用いた方法の骨格を変えることなく、「繰り込みの方法」が使える形に少しばかり書き改めます。「思わしくない項」を消去すると、私達の論文と同じ結果を得ることができました。

ベルギーの研究者のコメントに対する回答に、“All roads lead to Rome.”を使いました。計算の方法は異なっても最後の結果は同じになる、そう主張したかったのです。ローマまでの道路標識は「思わしくない項」を消去することであるとも述べ、「繰り込みの方法」の意義も強調しました。この回答も、やはりレフェリーの審査を得なければなりません。レフェリーの意見に、ことわざを消去せよとの指示がありましたが、私はそれを拒否しました。ことわざが物理の論文に残ったのです。

少し横「道」にそれたかもしれません。「世界ことわざ比較辞典」の「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」の項には、質問に関することわざがいくつも載っています。「一度道に迷うより二度尋ねる方がよい。」（ドイツ及びオランダ）、「道に迷うより聞いた方がまし」（英語）。これらは道に迷う、をテーマにしています。私は知らない町に行ったならば、道を尋ねることをつねに心掛けています。十数年前のある時、妻と共に北イタリアのパルマという町に一週間ほど滞在したとこがあります。ガイドブックを見ると、ヴェネツィア（ヴェニス）はパルマから鉄道で簡単に行ける街であることに気付きます。「思い立ったが吉日」、すぐにヴェネツィアへ出発します。駅に着くとまず観光案内所に立ち寄り、町の地図を手に入れます。その地図には町の細い道までくまなく書き込まれています。その地図を見て、サン・マルコ広場まで裏道伝いに行こうという気になり、さっそく実行に移します。道に迷いそうになると、ヴェネツィアっ子とおぼしき人を捕まえては地図を示しながら道を尋ねます。「道に迷うより聞いた方がまし」を実行したのです。そして、無事にサン・マルコ広場に辿り着くことができました。それはそれは楽しいヴェネツィア散歩でした。

「一度誤るより二度尋ねる方がよい」（ハンガリー）、「問うて失うものがあろうか」（英語、フランス、メキシコ）、「何も尋ねない者は何も学ばない」（英語）、「人は問うことによって学ぶ」（スペイン、メキシコ）。質問の積極的意味を訴えることわざが、「世界ことわざ比較辞典」に数多く見られます。学ぶことの本質は質問にあり、とでも宣言しているかの如く質問の意義を強調しています。質問で思い浮かぶのは幼児です。幼児は何事についても「どうして？」と親に質問します。幼児の質問に親がいちいち答えるのは、幼児の言語能力の問題もあり、難しいのかもしれません。しかし、幼児の質問をする姿勢が、小学校、中学校、高校、大学に進むにつれて失われてゆくのは何故なのでしょうか。おそらく、学校では質問をする行為を積極的に評価していないからなのではないのかと勘繰りたくなってしまいます。ゆとり教育とか、ゆとり教育批判などのように、何を教えるかを教育の場で議論することは多いのですが、そんなことより質問をするという学びに向かう姿勢を育む方策を議論する方が、教育の効果ははるかに上がると考えます。

長く大学で講義をして、一人だけ積極的に質問する学生に出会ったことがあります。彼が一年次の講義の折、「質問はありますか」と問うと手を挙げて質問したのが最初です。要領を得ない言葉で長々と質問をするため、私は少々苛立ちを覚えながら彼の質問に答えた記憶があります。講義終了後に最前列に座る女子学生が私の許に来て、「先生はいらいらしながら質問を聞いていましたね。」と私の姿勢をチクリと批判しました。学生の質問は辛抱強く聞く姿勢が大切であることを教えられました。それ以降、その学生は私の部屋へよく質問に来るようになりました。私の苛立ちに気付かなかったようで、一安心しました。

その学生は私たちの研究室で卒業研究をしたわけではありませんが、卒業までしばしば私の部屋を訪ねてくれました。彼は大学院に合格していましたが、それを辞退してアメリカへ渡り、あちらの大学の大学院で学位を取得しました。学位を取得する前後に一時帰国をして、母校でセミナーを開くという知らせがありました。その頃私は大学の執行部におりました関係で、多忙を極めていました。そのため、彼のセミナーに出席できませんでした。セミナー終了後、彼は私の同僚に「せっかく、渡辺先生に聞いてもらうためにセミナーをしたのに、来てくれなかった。」と不満を漏らしたそうです。彼はまだ私のことを覚えていてくれたのです。申し訳ないことをしてしまいました。

第２部　ことわざコラム

第１章　歴史は繰り返す

古後　靖弘

今年２月 24 日に発生したロシアとウクライナの戦争は、半年を経過しました。2 か月経過した頃に、誰のための戦争かと称して、月刊文芸春秋６月号で特集が組まれ、「ウクライナ残酷な物語」と題して元ウクライナ駐在大使・黒川裕次が寄稿している。その中で「ウクライナ人は、自らの国を守るために死力を尽くしている。他国に頼り切っていてはこれほどの共感は得られなかったであろう。有事に備えて日本がウクライナに学ぶことが多く、同時に親日国の危機を支えることは、**情けは人の為ならず**ということにもつながっていくのではないでしょうか。」と結んでいることに注目しました。

情けは人の為ならずという諺は、他人に情けをかけておくと、それがいつかは自分のためになるというわけです。この解釈とは異なり下手に人に情けをかけて助けるのは、その人の為にならない、自立を妨げるということだとする解釈もあります。古くは『平治物語』で源頼朝が敵に追い詰められたときに命を救ってくれた鵜飼を 20 数年後に探し出して恩に報いたというくだりに「情けは人の為ならずとも、かやうの事や申すべき」と記しています。いずれにしろ、この諺には、双方の打算が入り込む余地があるわけで、元ウクライナ大使は、自由と民主主義を守るために戦うウクライナを助けることは、将来の日本の安全保障にも役立つ時が来るということを言いたかったに違いありません。

ウクライナ侵攻当時のゼレンスキー大統領の言動をふりかえると、イギリス議会をはじめ、アメリカ議会、国連総会等で、更には日本の国会でも演説しています。「アジアの制裁国第一号に日本のリーダーシップを発揮していただきたい」。日本は、平和憲法の手前防弾チョッキやヘルメット位で我慢してもらっていますが、ロシアは、西側各国の武器支援で予想外に難航しています。ゼレンスキー大統領は、私達はあきらめない、ロシアへの経済制裁を強化してくれ、ウクライナの武装強化は欧州を救うのだ、武器を送ってくれと各国に呼び掛け続けています。アメリカは最初から軍隊を派遣することはないと明言し高性能の武器等を供与し続けています。

このゼレンスキー大統領の世界への度重なる要望を聞いていると**人の褌で相撲を取る**という諺を思い出しました。他人の力を巧みに利用して抜け目なく自分の利益を図る意味ですが、人の褌で相撲を取るというのは、上手に褌を出させるのが智者なのです。例えば、国連の改革ができていれば、ロシアを含むどんな侵略にも対応できたであろうとか、各国の兵器の供与がなければ、戦争は長引き犠牲者は増えるばかりだと、言い続けています。さすが映画の演出家から大統領に登り詰めた人物です。しかしその後のウクライナ国土の惨状と国民の多数の死傷者を見ると戦争を始める前にロシア同胞の民として、どうして話し合いができなかったかと悔やまれます。複雑な民族性があるにしろ、勇気と信念だけで突き進んでいるように感じられ残念です。

プーチン大統領は、ロシア人の伝統的理論の言動行動を進めているといわれています。国連の拒否権を持つ常任理事国でありながら、自ら国際秩序を破ったウクライナ侵攻は、世界の国際社会を**青天の霹靂**の渦に巻き込みました。しかし**寝耳に水**のようなそぶりをしたバイデン大統領の言動は、疑問符がつきます。ウクライナを実質的な NATO 加盟国に仕立

て上げ、高度な衛星映像に基づく情報を得ている戦略国アメリカがロシアの行動を知らないわけがありません。自国の軍事行動の矛を収めたのは、核戦争への懸念が頭をよぎったからでしょう。その意味で我々はバイデンに感謝すべきかもしれません。

今回プーチンは、ウクライナが、NATO 軍事同盟への加入をにおわせていたことで、一段と危機感をもって侵攻を開始したわけですが、ロシアは、西欧諸国との関係では、NATO 軍事同盟が強化されていくことは安全保障上の懸念として我慢ならないことだったのでしょう。この危機感に**火に油を注ぐ**ように、長らく中立を保ってきたフィンランドとスウェーデンが同時に NATO 軍事同盟に加入の意向を示し、7 月早々に加盟議定書に全 30 ケ国の署名がなされました。一国で加入をちらつかせたために侵攻を許したウクライナの動静を見て、二国そろっての決断ですから賢明な策と言えましょう。**赤信号皆で渡れば怖くない**ということでしょう。ウクライナもすでに加盟意向を表明しており、ロシアも同盟国関係を強化するなど対抗していますが、8 月に入り中央アジア関係国との足並みが乱れてきています。アフリカ諸国の動向を勘案すると国際情勢は益々複雑化していくでしょう。

今日本は、専制国家主義の中国、ロシア、北朝鮮を目の前にして、ウクライナ問題は**対岸の火事**ではなくなってきました。アメリカとの同盟関係強化や軍備力増強、憲法改正の議論等が白熱化してきました。経済制裁の余波が世界各国にも影を落としています。日本は制裁で経済に返り血を浴び、ロシア憎しの世論に押されて多くの国益を損なっては**本末転倒**だと心配する向きもあります。やはり**一筋縄ではいかない**のです。

中国は、今回のロシアの侵攻を西側諸国と一致して非難してこなかった大国です。しかし時間の経過とともにロシアが国際社会で孤立してきたことに気づいているに違いありません。「各国が責任ある方法でウクライナ危機を適切に解決するように推進すべき」との優等生発言もありますが、「支配的地位を利用した身勝手な制裁は世界の人々に害をもたらす」とも言っています。一帯一路で世界各国を結び付けようとする巧妙な大国ですから、**「他山の石」**としていろいろ学習しているに違いありません。

1945 年、日本は、日ソ不可侵条約が破られソ連の侵攻を経験しましたが、77 年間という長い期間、紆余曲折はありながらも平和を享受してきました。今回の事件で日本は、真剣に自立と結束をもって外交力を発揮する時期にあると思います。ロシアのウクライナ侵攻は正しく**歴史は繰り返された**というべきですが、歴史の教訓は活かさねばなりません。

この実りなき消耗戦を終えさせるために国際社会は、歴史に学ぶ新しい知恵を絞りだすことが求められています。

参考図書：『岩波ことわざ辞典』時田昌瑞（岩波書店）
『ことわざの卵』時田昌瑞（朝倉書店）
『月刊文芸春秋 6 月号』（2022）
『第三次世界大戦はもう始まっている』エマニエル・トッド（文春新書）

第２章　あなたは、始点派か、終点派か？ー始めよければ終りよし

小森　英明

本誌の第４号（2020 年発刊）では、＜終りよければすべてよし＞の諺を、イギリス発の功利主義と結びつけて考えてみました。

今回は、その対極とも言える、＜始めよければ終りよし＞を扱ってみたいと思います。

時田昌瑞氏が著した『岩波ことわざ辞典』（岩波書店、2014）によれば、これらは「方法や方向に重きを置いているもので、見方の視点が異なるだけ」であって、本来的に両者は「対立するものではない」と記されております（同書 141 頁）。

しかしながら、（私も含めて）素人目には、一体、＜始め＞が大事なのか、＜終り＞が大事なのか、その判断に迷うところであろうかと忖度されます。

概して、このように諺には、一見すると「反対命題」が存在しているようです。このことは、外山滋比古氏（故）が『ことわざの論理』（ちくま学芸文庫、2009 年）で、「ことわざに相反する命題のものがあっても、それはことわざの頭が悪いからではない。複雑な人間の現象に細かく即応しようとした結果がそうなったのである。社会がひと筋では行かぬということだ。」（同書 60～61 頁）と、既に喝破されております。

ところで、この＜始めよければ終りよし＞をいささか心理学的に解釈すると、＜始め＞とは‘動機’に、＜終り＞とは、その‘動機’を実現するための‘行動’もしくは‘結果’にそれぞれ該当するものと思われます。

したがって、もし本人にとっての‘動機’が順当であるならば、それを実現するためにとった‘行動’もしくは‘結果’も、必然的に納得せざるをえないという、ある意味での‘動機’中心主義になろうかと考えます。

しかし、それにも増して注目すべきは、‘動機’を現実化するための‘行動’をとることで、結果的に、その‘動機’が強化されてしまうことが、ニューヨーク在住のセラピスト、ジョージ・ウェインバーグ（George Weinberg）氏によって指摘されている点です。

そうなると、この‘動機’こそはとても大切なことになります。そして、こうした‘動機’がすべてである点を強調して止まない諺こそが、＜始めよければ終りよし＞ではないでしょうか？　＜終りよければすべてよし＞と同様に、＜始めよければ終りよし＞もまた重要な示唆を我々に日々与えているものと私は確信いたします。

なお、前出の時田氏の辞典では、この諺の淵源や成立の過程には殊更に言及されていないようですが、敢えて想像をたくましくすると、その背後には日本に多大な影響を及ぼした「大乗仏教」の存在が予想されます。

例えば、ブッダが迷いを離れてさとりを開いた、そのさとりの内容が説かれている『華厳経』が我が国に及ぼした影響です。同経では、「先照高山（せんしょうこうざん；太陽が出るとまず高山を照らし、徐々に低いところに降りてくること）」という四字熟語と共に、その思想自体がとりわけ難解である点がよく指摘されます。

その一方で、同経の巻第八では、「初発心時，便成正覚（しょほっしんじ、べんじょうしょうがく；初めて自分が仏になろうと思い立つときに、すなわち人はさとりを得る）」

といった有名な表現にも見られるように、‘動機（自分が仏になろうと思い立つこと）’に重点が置かれていることも、また看過できません。

これなどは、＜始めよければ終りよし＞という諺と密接な関係があると確信いたしますし、両者が同じ構造を有していることすらうかがえます。

ただ、こうした大乗仏教の思想は、わが国では独自の発展を遂げて、比叡山を中心に「本覚思想（いわゆる修行不要論）」へと結実いたします。日本の道元（1200～53）などはこの思想そのものに激しい疑義を呈し、宋への渡航と留学を実際に企てたくらいです。

ともあれ、わが国独自であろう＜始めよければ終りよし＞という諺の成立の背景には、大乗仏教の思想が在ったという可能性は、極めて濃厚であると私は考えます。

…話が少々、込み入ってまいりました。

それで突然ですが、今度は、認知症を患う母の言動と共に、＜始めよければ終りよし＞という諺を考えてみたいと思います。

以下は、『日本笑い学会新聞 166 号』（日本笑い学会発行）に寄稿した私の文章です。

> 私（小森）の母は、80 代後半の高齢者で、認知症（アルツハイマー中期）の診断を受けております。その母と会う度に、こちらが意識的に心掛けていることがあります。それは、‘笑顔’で接するということです。
> 母から、「何しに来たん？」と聞かれると、笑顔で「あなたに会いに来ました」と、真面目に答えます。すると、母は「え？」と言いながら、嬉しそうに招き入れてくれます。
> 御承知のように、アルツハイマーには中核症状の他に BPSD（行動・心理症状）が見られるため、介護する側が手を焼く場合が多いようです。
> 実際に、母の場合は、易怒性（いどせい、怒りっぽさのこと）や暴言癖が顕著でした。それが、何と‘笑顔’を交わすことで、徐々に鎮静化を見せ始めたのです。
> 併せて、介護する側にも心理的な余裕も生まれますから、まさに一石二鳥です。

上述の「あなたに会いに来ました」という挨拶は、フランス産の介護技術“ユマニチュード”に由来します。例えば、食事に招かれた際に、招かれた方は招いた方に対して、「あなたの御馳走を食べに来ました」とは、通常、申しません。そして、この“ユマニチュード”では、相手との‘絆(きずな)’を何よりも大切にします。全ては、この‘絆’を相手と出会った「最初（始め）」に築くことにあると言っても、過言ではありません。

また、こちらが‘笑顔’で話しかけるのは、他者のとる態度や意図に対して、比較的に鈍感になると言われる認知症を患った人でも、相手の‘笑顔’だけはその判別が容易である、という説に因んでいます。さらに、「ミラー効果」といって、こちらが向ける‘笑顔’に対し、相手側も‘笑顔’で対応する場合が多いという理論にも立っています。

総じて、このプロセスでは、＜始めよければ終りよし＞という諺を、何よりも私自身が実感する瞬間です。何事にも本気で取り組むべきだとは、正に、認知症を患った母を相手にした際に痛感いたします。こうしたことも、前出の外山氏の言葉を借りれば、「複雑な人間の現象に細かく即応しようとした結果」なのかも知れませんが…。

何れにせよ、物事の始点も終点も、極めて大切であることには変わりないようです。

第３章　「コロナ禍における小さな変化」

佐古　恵里香

2022 年は、コロナ禍、ウクライナ戦争、食糧不足、エネルギー問題と世界的に大きな変化がございましたが、本稿では、個人的な小さな変化についてお話したいと思います。

現在、私は、日本語教員として働いています。今年で 6 年目になります。今年度の 4 月頃までは、コロナ禍における入国制限によって、留学生が入国しにくい状態でして、様々な影響が仕事に出ておりました。特に、印象に残っているのは、授業形態の多様化です。コロナ禍以前は、ほぼ対面授業一択の状態でしたが、コロナ禍において、オンライン授業やハイブリット授業が選択肢にあがりまして、何の前触れもなく、一気に、働き方改革が起こりました。しかし、もはやその革新的と思われたオンライン授業も、気が付けば、今年で 3 年目を迎えまして、だんだんとこちらの世界観が「標準」になってきたようにも思います。「石の上にも三年」と言いますが、はじめは難しいと思っていたことも、徐々にうまくなるものなのだなあと、感慨深いです。

次に、最近のニュース（2022 年 8 月末）においては、性同一性障害をカミングアウトしたタレントの Ryuchell が「新しい家族の形を探したい」と、Peco と離婚したことが記憶に新しいかと思います。多様な家族の形が認められる社会になるということは、様々な立場の方が尊重され、生きやすくなることなのかもしれません。家族の形が、「十人十色」と認められる時代を築いてくれた方々に感謝です。また、Ryuchell は、パパタレントとして育児においても活躍していましたが、社会においても男性の育児参加が進んでいるように思います。例えば、三男の通う保育園の送り迎えにも、最近、父親の姿が増えました。しっかりとした統計をとっているわけではないので私の印象になりますが、長男が保育園に通っていた 5・6 年前頃よりも、男性の姿が増えているように思います。（5・6 年前は、10 人中 1 人ぐらいで、今は 10 人中 3 人ぐらいでしょうか。）コロナ禍における働き方改革が功を奏し、在宅ワークをする方が増加したことで、必然的に、男性も家事育児に参加しやすい環境へシフトしていったのではないでしょうか。本当に、隣の芝はいつも青いと思います。

最後に、私事で恐縮ですが、本年度より大学院博士課程で研究をさせていただいております。子どもを持つ 30 代後半（女性）が言語研究をしたいと進学することは、非常に非現実的なことと思いまして、なかなか決心ができない状態でございましたが、様々な方々に支えていただきまして、昨年、一念発起し、最初の一歩を踏み出すことができました。応援してくださった先生方や、私の入学を認めてくださった大学院の先生方におかれましては、この場をお借りして、心より感謝申し上げます。いつもありがとうございます。

本稿では、個人的な小さなことではございますが、コロナ禍における働き方や社会の変化、そして、多様性を受け入れていただいた体験について、お話させていただきました。これからも、社会環境は、目まぐるしく変化して行くだろうと思いますが、お互いを尊重し、多様性を認め合うことで、それぞれがそれぞれの Happy を実現できるといいなぁと思います。今年も執筆の機会を与えてくださいましてありがとうございます。最後までお読みいただきありがとうございました。

第４章　八重山の昔話２題ほど

辻　維周

八重山には本土と似たような昔話があり、それが本土のことわざにつながっているものも多数あります。今回も八重山で聞き取った昔話２題と私の体験とをお届けしましょう。

１．黄金の花

昔、ある村に正直者のお爺さんとお婆さんとがいました。気立てがよく、若い頃から村のために何くれとなく尽くし、気の毒な人がいれば誰彼となく助けて、その人が喜ぶのだけを楽しみにしていました。そのため暮らしはいつも楽ではありませんでしたが、二人は少しも気にすることなくせっせと働いていました。お爺さんは元気で働き好きでしたから、毎朝暗いうちから起き出して、遠くの畑に出かけて一日中働き、夕方は日が暮れてから帰る事が日常でした。

ある日の夕方、少し早めに畑仕事を終えたお爺さんは「後はまた明日に」と元気な足取りで帰り道を急いでいましたが、ふと道端で光っているものを見つけました。不思議に思って近づいてみると畑の中にある一坪ほどの荒地に生えた野草に、黄金の花が一輪大きく咲いています。お爺さんは思わず駆け寄ってそれを採ろうと両手を差し出しましたが、すぐに両手を引っ込め、そのまま後も見ずに家路を急ぎました。

すっかり暗くなって家にたどり着いたお爺さんは、薄暗い明かりのもとでお婆さんに夕方見た黄金の花の話をして聞かせました。それを聞いたおばあさんは「惜しいことをしましたね。どうしてそれを持って来なかったのですか」といかにも残念そうな口調で文句を言います。するとお爺さんは「いやいや、野草であってもそれは他人様の土地に生えている花だ。採ってはいけないのだよ。我々に徳があればそのようなものはひとりでにこちらに寄ってくるものだ。ちっとも惜しくはない」と言って聞かせました。

その時、盗人が床下に隠れており、この話を聞いて、「良いことを聞いた。黄金の花を採ってこよう」と大喜びで床下から這い出し、松明を持ってその花の所に急ぎました。しかし話に聞いた場所に行っても花は全く見えません。そして草むらに足を踏み入れようとすると、そこにはハブがとぐろを巻いて今にも飛びかかろうとしています。

驚いた盗人は後に引きましたがその顔には怒りの色がにじみ出ており、「あの爺、俺が床下に隠れているのを知っていて、俺をハブにかみ殺させようとしたのだな。どうしてくれよう」としばらく考え、「このハブを生け捕りにしてあの爺の家に投げ込んでやろう」とハブを生け捕り、お爺さんの家にやってきて雨戸をこじ開け、ハブを中に投げ込んで帰ってしまいました。

翌朝早く目を覚ましたお婆さんが雨戸を開けてみたところ、そこにあるものを見てびっくりして大声を上げました。「お爺さん、お爺さん、早く起きてください。」そのおばあさんの声に何だろうと飛び起きてきたお爺さんもびっくり仰天。そこには昨日見た黄金の花がそっくりそのまま置かれていたのでした。「お爺さんの言ったとおりでしたね。私たちに徳があったので黄金の花は自然とこちらに来たのですね。」

喜ぶお婆さんの姿を見て、おじいさんもにこにこしてうなずいていたということです。

この話は本土の「勧善懲悪」譚とは一味違うものであり、どちらかと言うと「果報は寝て待て」の部類に属するものかもしれません。しかしその「果報は寝て待て」の意味合いを、現代では「良い事は寝て待っていればやってくる」という意味に取り違えている人が多く見られますが、それは全く見当外れです。

この諺は仏教の教えから発せられたものであり、本来の意味は「やるべきことを全てやり終えたら、あとは焦らずのんびりと構えて待つが良い」ということであり、「良いこと」を呼び寄せるための努力を奨励しているものなのです。この老夫婦は後ろめたい事は一切せず、ひたすら善行を積むという努力をした結果、向こうから黄金の花が飛び込んできたのですから、まさしくこの諺の意味にぴったりなのではないでしょうか。

もうひとつ、今度はいつの時代も人間は身勝手な生き物だなあと実感させられる昔話です。

２．見直されたカラス

昔、波照間に沢山のカラスがいて、色々な悪さをし、島の人々を困らせていました。あまりにも悪戯が過ぎるので、カラスを１羽捕まえてそれを縛ってつないでおけば、驚いて逃げてゆくだろうと考え、カラスを１羽捕まえて広場につないで様子を見ていました。するとカラスたちは逃げるどころか、ますます沢山集まってきて島民たちを脅かします。仕方がないので捕まえたカラスを逃がしてやると、カラスたちは勝ち誇ったかのようにますます悪戯が激しくなりました。

困り果てた島民は、神様に「カラスが畑を荒らし、食べ物までを盗られて困り果てております。どうかカラスたちを一羽残らず島から追い払ってください」とお願いし、神様もその願いを聞き届けてくださり、カラスを一羽残らず追い払ってくださいました。

ところがカラスがいなくなってからというもの、今度は畑に沢山の青虫が発生し、作物を食い荒らして全滅させてしまいました。島民たちはそこでやっとカラスたちが悪戯はするけれど、害虫を退治してくれてもいたのだと言うことに気がつき、また「勝手ながら」と神様にお願いし、カラスを島に戻してもらいました。それからというもの、畑の害虫が全くいなくなったということです。

この話は非常に単純で、人間とからすとの「共利共生」に気づいた人間たちの話ですが、皮肉なことに今度は青虫を害虫と決め付けています。

いつの時代でも人間中心の考え方は変わっていないものだと、別の意味で感心させられますね。

そして最後はつい最近、私が体験した「情けは人の為ならず」にぴったりな事例です。

帰宅途中、側溝に落輪している車があったので、すぐＵターンして救助に。状況を見極めてからすぐ知り合いに連絡し、一人は近くの大きなお菓子屋さんから若い二人の助っ人を手配。もう一人はフォークリフトを持って来て牽引準備完了後、私が落輪車の運転席に座り牽引開始すると、すぐ上がりました。

後でわかったことですが、救助した車の持ち主は、何と岡山県重要無形文化財保持者の備前焼作家の方でした。

第５章　寅年の名言をめぐる歴史散歩

三木　恒治

今年は寅年。虎と言えば、大の野球好きの私にとって真っ先に思い浮かぶのは阪神タイガースです。昭和 37 年（1962 年）の寅年には、名将藤本定雄監督のもと見事リーグ初優勝を果たしています。この時はダブルエースの小山が 27 勝、村山が 25 勝を挙げ、「**小山、村山、雨や**」の投手ローテーションを指す言葉が流行語になったと聞きます。

さて、タイガースの話はさておき、今回は寅年の有名人に関連した名言、ことわざを振り返ってみることにしました。歴史上の寅年の人物を探ってみると、1542 年生まれの徳川家康が知名度では群を抜いています。「**人の一生とは重き荷物を背負うて遠き道を行くがごとし**」という言葉は、誰もが一度は耳にしたことがあるのではないでしょうか。他にも、「**不自由を常と思えば不足なし**」「**心に望みおこらば、困窮したる時を思い出すべし**」「**堪忍は無事長久の基**」などが知られていますが、いずれを取っても隠忍自重、深謀遠慮の重要さを説いたものばかりです。寅年よろしく彼は天下という獲物を辛抱強く虎視眈々と狙っていたのでしょうか。「**一富士二鷹三茄子**」は七五調のリズムで耳慣れた成句となっていますが、家康の好物を順に並べた言葉とされています。これについては日本三大仇討、つまり「曽我兄弟」、「忠臣蔵」、「荒木又右エ門」を指しているとの異説もあります。

上杉謙信は、徳川家康より一回り上の 1530 年生まれで、幼名は虎千代、元服後は景虎、関東管領の上杉家を継いだ後は政虎、輝虎と改めています。こちらは名前からして虎尽くしとなっていますが、なぜか虎の通称（「甲斐の虎」）で呼ばれているのは好敵手の武田信玄で、謙信の方は「越後の龍」と呼ばれています。彼については「**敵に塩を送る**」ということわざが有名です。困っている相手の弱みに付け込むのではなく、その窮状を救ってやらねばならないという意味です。川中島の戦いの後、甲駿相三国同盟を破棄した信玄が相模の北条氏、駿河の今川氏に仕返しで塩止めされた折、「昨日の敵は今日の友」となった謙信が越後から山国の甲斐に塩を送ったという逸話に因むと言われています。真偽のほどはともかくとして、いかにも義を重んじる謙信らしさを物語るエピソードです。また、「**四十九年一睡の夢一期の栄華一盃の酒**」という彼の辞世が伝わっています。同じ寅年でも自らの手で薬剤を調合したほどの健康オタクで用心深い家康とは真逆を行く豪快な生きざまをこの句に見て取ることができます。彼が戦術的な天才であることは論を待ちません。しかし、川中島の戦い、小田原城攻略、晩年の能登遠征など彼が関与した戦は、「弱きを助け、強きを挫く」という大義名分こそそれなりに評価できるものの、いずれも大局的な見通しのない出兵だったように思われてなりません。家康のような長期的な戦略の視点が彼にあれば、天下の形勢も変わっていたことでしょう。もちろんそうした淡白な潔さが謙信の魅力で人気の要因でもあるのですが…

幕末に目を向けると、長州の吉田松陰（幼名寅之助、通称寅次郎）が 1830 年生まれの寅年です。彼の言葉は非常にたくさん残されています。意識的に弟子たちに人生の教訓を伝えたかったのだと考えられます。そのうちの一部を紹介しますと、「**学問とは、人間はいかに生きてゆくべきかを学ぶものだ**」「**過ちがないことではなく、過ちを改めることを重んじよ**」「**思想を維持する精神は、狂気でなければならない**」―どれをとっても松陰の実

践的で革新的な人となりを表しているものばかりですね。松陰の凄みは、言葉だけでなく行動を伴っているところです。「ならぬものはならぬのです」という会津藩の保守的な家訓とは好対照です。松陰の言葉、生きざまをたどってみれば、長州と会津の両者が相容れることなく幕末維新の対決に至った背景がよくわかるでしょう。ただ、彼の行動が実を結ぶには、まだ時代の機が熟していなかったことは確かですし、それが彼にとっては最大の悲劇でした。実った果実を思う存分享受したのは、彼の弟子たちでした。

現代の寅年の政治家で忘れてはならないのが、バカヤロー解散などで度々物議をかもした昭和の名宰相吉田茂です。彼に関しては、「**外套を着てやるから街頭演説だ**」「**君たちとは食べ物が違う、人を食っているのさ**」など豪放磊落で破天荒な言動に事欠きませんが、戦後日本が奇跡的な復興を遂げることができたのは、経済優先をモットーに掲げた吉田ドクトリンに負うところが大きいのは紛れもない事実です。1878 年生まれの彼は東条英機やヒトラーら戦争を主導した枢軸国の要人たちよりも年配で、チャーチルやスターリンと同世代ですが、ナチスドイツを打ち負かした彼らの老練さと対等に渡り合うためにはそれなりの経験値と腹芸が必要だったということでしょうか。「**戦争に負けて、外交に勝った歴史はある**」は彼の名言では珍しく常識的なものですが、おそらくこちらの方が吉田の真骨頂だったのかもしれません。

吉田と同年齢、外務官僚の首相経験者というキャリアまで同じ広田弘毅は、東京裁判で文官唯一の死刑となりました。2・26 事件直後に首相となった当時は「ヒロッタ内閣」と揶揄されましたが、軍部が暴走する時代に政権の中枢にいたことが仇となったのです。まさに戦争に翻弄された後半生でした。「**雷にあたったようなものだ**」、と彼は判決について述懐しています。死刑の衝撃もさることながら、誰に災難が降りかかるかわからないという戦犯裁判の不条理を皮肉った言葉とも解釈できます。広田が表舞台から姿を消すのと相前後して吉田が一躍脚光を浴びることになり、寅年の二人の明暗はくっきりと分かれましたが、このことは戦後という時代の大きな変わり目を象徴しています。

最後に、私の地元の岡山の寅年男を紹介して締めくくりとしたいと思います。これまで触れてきた人物ほど有名ではありませんが、最後の特攻隊として終戦の玉音放送を聞いたあと沖縄へ出撃した海軍中将の宇垣纏です。陸軍大臣として軍縮を断行したために、組閣の大命が下ったとき陸軍幹部の妨害に遭い頓挫を余儀なくされた宇垣一成（陸軍大将）とは同郷です。1890 年生まれの彼は、真珠湾奇襲の作戦立案に参画したことでテレビや映画の登場人物にもなっています。山本五十六元帥の参謀としての資質、実績については、正直なところ毀誉褒貶相半ばするところです。しかし、戦争指導者たちの多くが敗戦の責任を何ら取ろうとしなかった（自決した者の大半は戦犯指名を受けた後です）のに比べると、多くの若者たちを死に追いやった上官としての彼なりのけじめのつけ方には昭和最後の軍人としての矜持が窺われます。元帥から遺贈された短刀を持参して死地に赴いたとも伝えられています。「**武人として死に場所を与えてくれ**」が彼の最後の言葉となりました。出撃当日の写真が残っていますが、泰然自若とした穏やかな表情が印象的です。先日、岡山市街地の外れにある海軍平和神苑を訪ねました。ここの一角に宇垣を顕彰した「菊水慰霊碑」が立っています。彼を慕って最期をともにした 17 人の部下たちも一緒です。この日も暑い一日でしたが、宇垣らが旅立った日にふと思いをはせ黙祷を捧げました。それに応えるかのように、背後の木陰から一陣の涼風が吹き抜けました。

第６章　リスクと虎穴と浅い川

山口　政信

1. リスク

リスクという言葉は、イタリア語の riscare（危険にさらされる）に起源があることを知りました。英語で用いられるようになったのは 17 世紀とのことです。

〇〇を危うくする、〇〇の危険を冒すなどに加え、「何かを賭ける」「勇気をもって試みる」といった意味があることを知るにイタリ、アッやっぱり、と胸を張る思いとともに、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」が浮かできました。

リスクを伴う、リスクを避ける、リスクを冒す、リスクを背負うなどの否定的な文言が多いことから、人生は「一難去ってまた一難」であり、世間は「前門の虎、後門の狼」に満ちていると言っても過言ではないでしょう。

このような人の世に対し、処世術とも言えそうな「君子危うきに近寄らず」が控えています。しかし、君子には例え難い私が「沈香も焚かず屁もひらず」では、人もその人生にも面白味が欠けます。無難に生きられるに越したことはないと思いつつ、沸々と湧く怖いもの見たさには抑え難いものがあるのです。回文の「クスリはリスク」はうなずけますが、リスクがクスリになるには、虎に噛みつかれるような経験が必要かもしれません。

2. 虎穴

しょせんは小市民のこと、コップの中の嵐に一喜一憂しているだけなのでしょうが、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」や「背水の陣」に見る精神性には憧れがあります。もちろん、希求するだけでは「飛んで火にいる夏の虫」になりかねませんので、為さねばならぬという義と責任を取る覚悟、彼我を洞察し脚下を照顧する冷静さが欠かせません。これらを総じて精神性と呼んでいるのです。

「危ないことは怪我のうち」「後悔先に立たず」ゆえ、用心に越したことはありませんが、何かを成し遂げた人にとっては、リスクは有効性の高いクスリだったはずです。偉人に向かって「虚仮の一心」と言うのは憚られますが、「涓滴岩を穿つ」を絵にしたような根気をもって邁進してきたことは、想像に難くありません。

新発見や新発明には天の啓示があり、必然の成果だけではなく偶然の花が開くことがあったようです。ダイナマイトは偶然の産物であり、青色発光ダイオードは 95％の研究者が省みない 5％の分野に賭けた成果でした。背面跳び（走り高跳び）は平凡な選手の失敗ジャンプによってもたらされました。このような逸話は枚挙にいとまがありませんが、いずれにせよ、自らの信念に基づいた挑戦を貫いた結果だったと言えそうです。

3. 浅い川

我が家からジョギングで 10 分程のところに、川幅が 70m 程で場所を選べば歩いて渡れる浅川が流れています。「名は体を表す」この川は、訪れる度に「昨日の淵は今日の瀬」と「浅い川も深く渡れ」を思い起こさせてくれます。

今や私は、堅牢な「石橋を叩いて渡る」に相応しい齢になりました。しかし、時として深みにはまることがあるかもしれませんが、自力で泳ぎ自分の足で立ち歩むことを潔しとする精神を失うことなく、残る生を全うしたいと考えているのです。

【執筆者紹介（五十音順）】

①氏名（担当章）
②出生年　③出身地　④所属

①蟻川　剛（第１部/第１章）
②1950 年　③東京都出身
④日本ことわざ文化学会理事

①清水　泰生（第１部/第２章）
②1965 年　③和歌山県出身
④同志社大学
　日本ことわざ文化学会理事

①時田　昌瑞（表紙説明、第１部/第３章）
②1945 年　③千葉県出身
④ことわざ・いろはカルタ研究家
　日本ことわざ文化学会副会長

①渡辺　慎介（第１部/第４章）
②1943 年　③神奈川県出身
④横浜国立大学名誉教授
　日本ことわざ文化学会会長

①古後　靖弘（第２部/第１章）
②1939 年　③大分県出身　④ことわざメル友会

①小森　英明（第２部/第２章）
②1962 年　③三重県出身
④武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員
　日本笑い学会三重支部運営委員

①佐古　恵里香（第２部/第３章）
②1983 年　③愛媛県出身
④京都精華大学 非常勤講師
　日本ことわざ文化学会理事

①辻　維周（第２部/第４章）
②1955 年　③東京都出身
④岡山理科大学教授

①三木　恒治（第２部/第５章）
②1956 年　③岡山県出身
④岡山理科大学教授
　日本ことわざ文化学会理事

①山口　政信（第２部/第８章）
②1946 年　③徳島県出身
④明治大学名誉教授
　日本ことわざ文化学会事務局長

日本ことわざ文化学会

ホームページ　https://www.kotowaza-bunka.org/

『コトワザあらかると』

2022 年 11 月 1 日　第 6 号第 1 刷発行

発行者：日本ことわざ文化学会 ©
「日本ことわざ文化学会」事務局
所在地：〒 700-0005 岡山市北区理大町 1-1
岡山理科大学教育推進機構 三木研究室
学会 HP：https://www.kotowaza-bunka.org/
E-mail：paremio@gmail.com